

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 3 年 6 月 16 日現在

機関番号：32615

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2016～2020

課題番号：16K02134

研究課題名（和文）近代英国道徳哲学における合理主義と感情論の帰趨：ヒュームとコモン・センス学派

研究課題名（英文）Rationalism and sentimentalism in the modern British Philosophy: Hume and the common sense school

研究代表者

矢嶋 直規 (Yajima, Naoki)

国際基督教大学・教養学部・教授

研究者番号：10298309

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,400,000円

研究成果の概要（和文）：ヒューム哲学は大陸合理論が展開した合理主義を源泉とし、道徳感情学説の影響のもとで展開し、トマス・リードらの常識哲学へとつながる。本研究ではヒューム哲学を合理論と感情論の二方向から再検討し、ヒュームが単純な懐疑主義者ではなく、常識哲学に通じる理性主義と自然神学の批判者として位置付けられることを明確にした。ヒュームの自然主義の背後には、クラークとバトラーの自然神学論争が存在する。本研究ではとりわけヒュームに大きな影響を与えた経験主義的神学者であるジョゼフ・バトラーとヒュームの関係に焦点を当て、経験主義道徳哲学と常識哲学の成立過程を解明した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

ヒューム哲学は懐疑主義とみなされているが、懐疑主義の意義は、日常的な信念の重要性を裏付けることにある。とりわけ重要な日常的信念とは科学的知識というよりも、宗教的信念であり、ヒュームは懐疑主義によって健全な宗教的信念の哲学的基礎とともに、健全な宗教的信念が確保され、社会に共有される仕方として哲学的対話のモデルを提示した。

この研究では、これまで英国経験論はロックから始まり、ヒュームにいたる懐疑主義の展開の過程とみなされることが多かったが、ヒュームは懐疑主義を最終的な立場としたのではなく、情念論や道徳論では常識の立場を擁護し、リードによって展開される常識哲学の基礎を据えたとする見方を提示した。

研究成果の概要（英文）： This study focused on the formation and the development of David Hume's philosophy. In particular, I discussed the influence of continental rationalism and moral sentimentalism on Hume's philosophy. I presented Hume not as a sceptic but as a critic of rationalism and natural theology. It became clear that the debates regarding natural theology by Samuel Clarke and Joseph Butler played a crucial role in forming Hume's naturalism, which led to the development of the experimental moral philosophy and common-sense philosophy of Thomas Ried.

研究分野：哲学・倫理学

キーワード：ヒューム 近代哲学 経験論 自然神学 バトラー 常識学派 蓋然性 合理論

## 1. 研究開始当初の背景

(1) 私はこれまで、従来懐疑主義者とみなされてきたヒュームの哲学を、その認識論・情感論を含めて一貫した道德哲学の議論と解釈し、それらの中心的主題である空間時間論・因果論・外的物体論の道德哲学的意義を明確にする研究を行ってきた。その研究によって私は、ヒュームの認識論が、道德哲学を宗教的権威や独断から解放し、人間に固有の経験に基礎づける意義を有することを論証した。

(2) これまでの研究では、ヒュームの独自性を明らかにするためにデカルト、ホッブズ、ロック、ハチソン、スミスなど英国哲学者との比較を試みた。その結果、ヒュームの理論は、それらの哲学体系に対する批判的応答として成立したことを具体的に論証することができた。すなわちヒュームの哲学体系には合理論と道德感情論の二つの流れが総合されている。しかしながら通常の哲学史の理解では、ヒュームは懐疑論者とされ、ヒュームの理論が常識哲学へと接続する理論的必然性が十分に解明されていないのが実情である。

## 2. 研究の目的

(1) 本研究では、ヒュームにおける合理主義からの影響と感情学説からの影響の解明をさらに発展させ、ヒュームが自然哲学的主題を人間の科学としての道德哲学へと展開した過程を、ヒューム道德哲学の成立史として探求することを目的とする。

(2) ヒューム道德哲学成立史において重大な影響を及ぼしながら、従来解明が十分になされていないジョゼフ・バトラーとの関係に注目し、バトラーによるクラークらの自然神学への批判がヒュームの道德哲学にどのような影響を及ぼしているのかを解明する。その際、ヒュームの自然宗教論の解釈に留意する。

## 3. 研究の方法

(1) 道理主義道德論への批判として成立した近代英国道德哲学の主要哲学者のテキストを精緻に検証し、それがヒューム道德哲学成立に果たした役割を検討し、近代における自然哲学及び自然神学の道德哲学への転換の構造を解明する。

(2) 米国プリンストン神学大学ゴードン・グレアム教授ら英米の専門家との研究交流を進め、また国際スコットランド哲学会をはじめとする国際学会で研究発表を行い、成果を投稿する。

## 4. 研究成果

(1) 近代英国哲学において自然神学をめぐる論争から道德哲学が成立したことをバトラーの道德哲学に即して解明した。近代英国における自然神学は、スピノザの無神論と機械論的自然科学から神の存在を擁護することを根本的な目的として成立した。ところが、自然神学による神の存在証明には、合理主義の立場から啓示神学を擁護することと同様の困難が付随する。この問題はクラークとバトラーの論争において明らかになり、バトラーは合理主義による自然神学の基礎づけを批判し、道德的経験の類比から神の存在を証明する方法を提示した。このことがヒュームの道德哲学成立の背景であり、またバトラーの議論がリードの常識哲学の成立を促したことを示した。

(2) ヒュームとバトラーの影響関係を解明した。ヒュームと同時代に活躍した神学者ジョゼフ・バトラーは、ヒュームによって彼の経験主義の先駆者の一人とされている。従来バトラーとヒュームの影響関係は重要視されていなかった。私は本研究の成果の一部として公刊した論文において、ヒュームがバトラーから因果律批判の根本的な発想を得ていることを示した。類比・蓋然性・自然・自由・必然などのヒューム哲学を構成する主要概念はすべてバトラーの理論を念頭に

において展開されている。この指摘を通してヒューム経験論の文脈を明らかにし、またそれらとキリスト教神学との関連を示すことができた。

(3) ヒューム哲学の成立の背景を、バトラー道徳論の成立と、クラークとバトラーの関係を通して明らかにした。バトラーはヒューム経験論の成立において、ロックとともに重要な役割を果たした。バトラーは来世の存在を現世における生の変化との類比で証明しようとした。その発想は現世における現在と未来の関係にも当てはまる。ヒュームは信仰に関する懐疑主義を根拠として現在と未来の因果関係の成立を疑ったと考えられる。本研究でヒューム哲学の根幹をなす懐疑主義が、信仰の問題から生じ、自然認識に適応されたという解釈を提示することができた。

(4) 思惟可能原理と蓋然性の理論の関係を解明した。思惟可能原理とは、思惟することができるものは存在することができる、という原理を意味する。私は本研究で、この原理がデカルト、スピノザの形而上学の核心にかかわることをヒュームが理解し、それを独自の仕方でも展開していることを明らかにした。そしてこの原理がヒュームとリードの違いを理解するうえでも有用であることを国際学会で発表した。

(5) ヒュームとトマス・リードの共通の理論的源泉であるバトラーの人格同一性論を翻訳した。その解説では、人格同一性の信念が自然の斉一性の信念の成立の議論の一部であることを明らかにした。人格同一性についての議論はヒュームの形而上学の中心主題の一つである。従来ロックの議論がヒュームの人格同一性論の源泉とみなされてきたが、バトラーの議論からの影響を考察することでリードの常識哲学の成立の背景を明確にすることができた。

(6) ヒュームの自然宗教論についての新解釈を提示した。『自然宗教についての対話』はヒュームの宗教論の主要著作であり、対話者として登場する3名のモデルの特定は解釈上の一つの焦点とされている。私はバトラーとクラークの論争のヒュームへの影響を考察し、「クレアンテス」のモデルがバトラーと解釈する可能性を提示した。その解釈を通してヒューム自身のキリスト教への立場は無神論ではなく穏健な懐疑主義であり、ヒュームの目的は宗教を人々の知的な探求として社会の絆へと変革することであることを論証した。この主張は国際学会で口頭発表を行い、また国際誌に論文として掲載された。

(7) 近代英国哲学の成立にキリスト教神学への批判と批判的受容があることを明確にした。ヒュームを中心に据えて大陸合理論から常識哲学の成立までの歴史を導くのは、キリスト教神学の批判的受容であることを明らかにした。スピノザの人格神批判が、ロックの合理主義を通して理神論を生み出し、それへの反動が自然主義、信仰主義を生み出した。常識哲学は、バトラーの経験主義に影響された道徳論における自然主義によって、認識論における懐疑主義をヒュームが克服しようとした点に源泉を持つことが明らかになった。この成果は、キリスト教神学との関係を軸に近代英国哲学をとらえなおそうとする次なる研究課題に結実している。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計8件（うち査読付論文 3件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 3件）

1. 著者名 Naoki Yajima	4. 巻 51
2. 論文標題 Hume's Conceivability Principle	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Humanities: Christianity and Culture	6. 最初と最後の頁 77, 92
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 矢嶋直規	4. 巻 50
2. 論文標題 初期バトラーの思想形成：自然神学から道徳哲学へ	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 人文科学研究（キリスト教と文化）	6. 最初と最後の頁 53, 77
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 矢嶋直規	4. 巻 42
2. 論文標題 Colin Heydt Moral Philosophy in Eighteenth-Century Britain: God, Self, and Other	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 イギリス哲学研究	6. 最初と最後の頁 99, 102
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 Naoki Yajima	4. 巻 15(3)
2. 論文標題 Why did Hume not Become an Atheist?: the Influence of Butler of Hume's Dialogues	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 Journal of Scottish Philosophy	6. 最初と最後の頁 249, 260
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.3366/jsp.2017.0171	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 矢嶋直規	4. 巻 46
2. 論文標題 ヒューム哲学成立についての一考察：ヒュームとバトラー	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 哲学論集	6. 最初と最後の頁 1, 19
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 矢嶋直規	4. 巻 15
2. 論文標題 「神即自然」と「人間に固有の自然」	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 スピノザーナ	6. 最初と最後の頁 47, 68
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 矢嶋直規	4. 巻 40
2. 論文標題 ジョン・トーランド『秘義なきキリスト教』、『セリーナへの手紙』	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 イギリス哲学研究	6. 最初と最後の頁 86, 87
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 矢嶋直規	4. 巻 12
2. 論文標題 2016年度、アメリカ・プリンストン神学大学滞在記	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 ビューリタニズム研究	6. 最初と最後の頁 81, 82
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計13件（うち招待講演 3件 / うち国際学会 6件）

1. 発表者名 矢嶋直規
2. 発表標題 近代イギリス道徳哲学における名誉概念: 導入
3. 学会等名 日本倫理学会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Naoki Yajima
2. 発表標題 Hume's Conceivability Principle
3. 学会等名 The 6th International Forum of Sino-Japanese Philosophy (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Naoki Yajima
2. 発表標題 Introduction to the dialogue between philosophy and theology in the Scottish Enlightenment
3. 学会等名 Dialogues between Philosophy and Theology in the Scottish Enlightenment (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 矢嶋直規
2. 発表標題 初期バトラーの思想形成について
3. 学会等名 バトラー研究会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Naoki Yajima
2. 発表標題 Some Butlerian Influence on Hume's Dialogues
3. 学会等名 Hume's Dialogues: Symposium, Center for the Study of Scottish Philosophy (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 Naoki Yajima
2. 発表標題 Hume and Butler on Nature
3. 学会等名 Conference 'Science in the Scottish Enlightenment' (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 Naoki Yajima
2. 発表標題 Hume and Puritanism Studies in Japan
3. 学会等名 Luthean Theological Seminary at Gettysburg, Scholar's Meeting
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 矢嶋直規
2. 発表標題 ヒューム『自然宗教対話』におけるバトラー＝クラーク書簡の意義
3. 学会等名 西洋思想受容研究会(国際基督教大学)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 矢嶋直規
2. 発表標題 バトラー宗教論とヒューム道徳哲学
3. 学会等名 第11回日本ピューリタニズム研究大会
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 矢嶋直規
2. 発表標題 ヒューム道徳哲学の成立についての一考察：ヒュームとバトラー
3. 学会等名 上智大学哲学会第84回大会（招待講演）
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 矢嶋直規
2. 発表標題 J・バトラーとヒュームの必然性概念をめぐる一考察
3. 学会等名 京都ヘーゲル読書会
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 Naoki Yajima
2. 発表標題 Butler's Influence on Hume
3. 学会等名 Princeton Theological Seminary Visiting Scholars' Seminar（国際学会）
4. 発表年 2016年



1. 発表者名 Naoki Yajima
2. 発表標題 Butler and Hume on Nature
3. 学会等名 Center for the Study of Scottish Philosophy (国際学会)
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 社会思想史学会編	4. 発行年 2019年
2. 出版社 丸善	5. 総ページ数 856
3. 書名 社会思想史事典	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計1件

国際研究集会 Symposium: Dialogues between Philosophy and Theology in the Scottish Enlightenment	開催年 2019年～2019年
--	--------------------

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関		
米国	Princeton Theological Seminary		
英国	The University of Edinburgh		